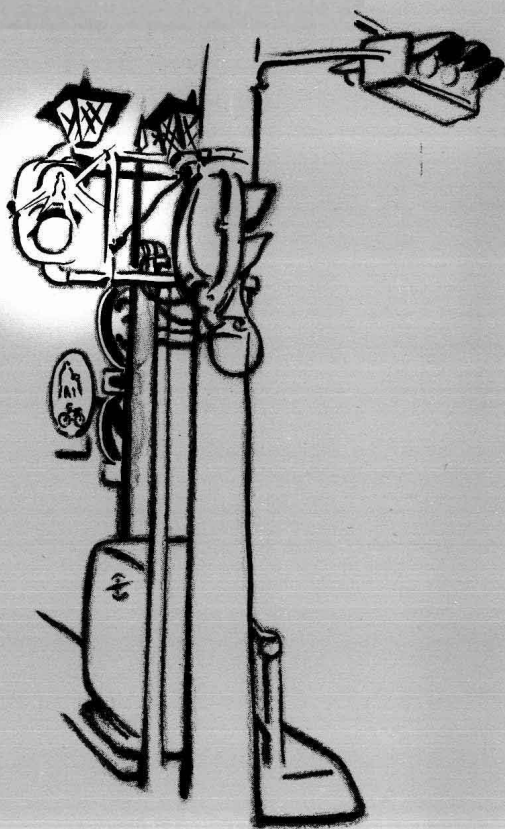


常盤新平

ガラスの中の街



筑摩書房

グラスの中の街

一九八三年三月二十日 初版第一刷発行

著者 常盤新平

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一—九一

電話 (二九一) 七六五二 (営業)

(二九四) 六七一一 (編集)

振替 東京六一四—二三三

印刷所 多田印刷 製本所 永興舎

© 1983 S.Tokiwa Printed in Japan

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替致します。

グラスの中の街
目次

I 朝のにおい

- 朝のにおい 5 早起き 8 ラジオ一つ
11 春を待つ時期 15 タクシーのなか
で 19 シチリアの春 22 恩人の存在 24
競馬と仕事 28 女の脚に乾盃 32 クリ
スティーの舞台 35 剣客の美女 40 春
の知らせ 42 東京のホテル 46 美しい
答 49 二人の少女 52

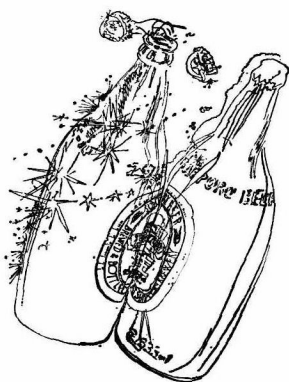
II タクシーでドライヴ

- 夏の汗 61 熱狂と誠実 64 若くて金が
なくて 67 酒との出逢い 72 悪文と名
文 75 今年のダービー 78 翻訳の仕事
82 ニューヨークでビール 85 本の時
間 89 アオサギの宿 92 ホテルのバー
で小さくなって 95 平凡な感じ 99 タ

クシーでドライヴ 101 ニュー・イングラ
 ンドの宿 104 帝都の女たち 108 宝さが
 しの楽しみ 110 モデルの弁 113 ごひい
 きの店 117

Ⅲ 三番街へ

高飛びの心境 123 サマー・ドレスの女た
 ち 129 『鬼平』とベニー・グッドマン 133
 七月の好意と贈物 136 ニューヨーク・
 シンドローム 139 エレベーターの話 144
 素顔のホームラン・キング 148 アル・
 カポネ氏の服装 150 私の選んだ作家 154
 ただ一日だけの街 158 小さな青春 161
 レナード氏の煙草 164 三番街へ 168 冬
 休み 171



Ⅳ 夏の終りの酒

夏の終りの酒 175 美しい嘘 179 万年筆

181 辞書について 185 女の煙草 190 フ

ファミリー・マン 193 電車のなかの作法

196 火鉢 199 よくある話 201 往年の名

画 204 父母の郷里の酒 207 マルガリー

タをもう一杯 211 父の腹 213 仲間の一

人 217 故郷の幻影 220 父の日を信じな

い父たち 224 酒場の沈黙 229

あとがき 236

初出紙誌一覧 238

グラスの中の街

装画・カット／三嶋典東

I

朝
の
お
い

朝のにおい

よく眠って起きた朝など、コーヒーやパンやベーコンのにおいが遠くからでもわかることがある。私には鈍感なほうで、電車のなかで厚化粧の女が香水のにおいをぶんぶんさせていても、さほど気にならないほうであるが、朝食のコーヒーの香りがにおってくるときは、きつと私の体の調子もいいのだろう。残念なことに、こんなおめでたい日は一年に何日もない。旅先で感じのいいホテルに泊って、朝の九時ごろ、ダイニング・ルームなんかのほうへ近づいていくと、コーヒーのにおいが流れてきて、そういうときは、じつに気持がいい。今日は天気もいいだろうと思ったりする。

それで、オレンジ・ジュースにトースト、目玉焼とカリカリに焼いたベーコン、コーヒーを注文して、コーヒーはおかわりする。家にいるときは、コーヒー一杯でもうたくさんという気分になるのに、旅に出ると、どうしてこうなのか。もし、その日、仕事があれば、みなさまに申し訳ないと思いながら、ビールの小瓶を食前にいただいたりする。休日なら問題ないので

あるが。

仕事場で仕事をしていて、帰る電車がなくなってしまうということがよくある。仕事が一段落ついて、友人と肥後の酒「美少年」を冷やで飲んでいて、時間がたつのを忘れてしまうということもある。その夜は仕事場に泊り、疲れているから熟睡して目がさめると、気分がよくて、朝日をうけて白く光る池袋の高層ビルが窓から見える。

家にいるわけではないから、腹もすいていて、とにかく何か食べたいし、その前にコーヒーを飲みたい。べつにコーヒーが好きだというわけではないが、薄いコーヒーが習慣のようになってしまった。

近くの喫茶店に行った。八時半ごろで、風が冷たい。セーターとシャツを通して、寒風はいりこんでくるようである。

その喫茶店は十人もしればいっぱいという、こぢんまりとした店で、昼のカレーライスがおいしい。こういう店は信用できるが、私はいちばん気に入っているのは、朝の雰囲気である。におい、といったほうがいいだろうか。

その朝も店のドアを開けた瞬間、コーヒーのにおいがした。新鮮で、清潔なおいである。しかも、店のなかが暖かい。喫茶店——コーヒーショップ——はこうでなくてはいけないと思うが、そういう店はなかなかない。喫茶店もチェーン組織になっていて、どこも似たり寄ったりになってしまった。

私はモーニング・サービスというやつを注文した。コーヒーとトーストと固茹での卵とサラダである。卵が目玉焼で、ベーコンとジュースとハッシュド・ブラウンがつけば、これはアメリカの朝食だ。ニューヨークでは、私の朝食は毎朝、右のようなメニューである。

ニューヨークは私の旅先であるから、したがって、朝食が楽しみだった。朝から酒を飲むということはなかったけれど。実は、仕事場に近い喫茶店を訪れるようになって、なぜニューヨークの朝食が好きになったのか、その理由がわかったのである。

仕事場にはじめて泊って、その喫茶店に行ったとき、私はおいに酔った。これが朝のにおいだと思い、なつかしさをおぼえた。こういうにおいに接したのはじつに久しぶりだった。なにか、朝にその喫茶店を訪れているうちに、どこかで同じにおいをかいでいたことに気がついた。

私はニューヨークに数多く行っているわけではない。それでアメリカの都を語るのはおこがましいのであるが、朝のコーヒーショップのにおいについては、私がいつてもいいと思う。それは、単純な、素朴な、清潔なおいなのだから。

朝のにおいである。それはコーヒーやパンやベーコンだけのにおいではなく、これから一日がはじまるという活気にみちたにおいである。

早起き

旅に出ると、早起きになる。七月末に宮崎と鹿児島をかけめぐり、八月はじめは青森と秋田に行つて、その間は毎朝六時には目がさめていた。どちらも仕事で、あわただしい旅だったから、夜になるとくたびれて、ビールの小瓶の一本も飲むと、眠くなって早寝した。それで、早く目がさめたのだから、早起きというのは気持のいいものである。そのことをあらためて知った。

しかし、わが家では朝寝坊というわけでもない。早起きを心がけてきた。会社員をやめたとき、せっかく身につけた早起きの習慣だけはつづけようと思つた。仕事でやむなく徹夜したときや、夜中の三時ごろまで飲んだとき以外は、サラリーマンだったころと大体同じ時刻に起きている。

朝の七時ごろに起きて、いまは勤めていないので、あわてなくてもすむのは有難いが、なんだか手持ちぶさたである。朝起きてすぐ仕事をはじめるというのも、変なものだ。とりあえ

ず煙草に火をつけて、新聞ということになる。

旅行に出て、早起きすると、こんなことはない。宿を出て、散歩したりする。ホテルなら、シャワーを浴びて、髭をそるし、温泉宿なら、ひと風呂あびて、得をしたような気分になる。

朝飯が待ち遠しい。家ではめったにそういうことがない。たいてい、コーヒーとトースト一枚でおしまいであるが、旅行中は朝食がおいしい。ホテルの洋食でも、旅館の和食でも、たいいきれいに食べてしまう。

早起きを重視するのは、人並の生活をしたからだ。家で翻訳したり、雑文を書いたりする仕事だからといって、お昼ごろに起きだしてくるような生活が厭なのである。それに、夜中までシコシコ仕事をするというのは、わびしいものだ。

理想を言えば、九時から仕事をはじめて、五時には終り、あとは酒を飲んで、食事をちゃんととり、TVを見て寝床にはいるという生活をしたい。つまり、平凡な日常生活である。

それがなかなかできない。早起きはするけれど、そのあとがいけない。一日がだらだらとつづいて、はなはだ緊張を欠いている。

旅では、そういうことはない。目ざめたときに、なぜか充実感がみなぎっている。家にいるときの、あのどろんとした感じがらない。

それでも、早起きだけはこれからも守りたいと思っている。どこにいても、それはつづけたい。早起きでなくなったら、そのほかの点でも崩れていくのではないかと心配なのである。私

は、早起きは三文の得ということをもまだ素朴に信じているのかもしれない。

